

## [総合的な学習の時間]

# 児童同士のかかわり合いに重点を置いた 総合的な学習の時間の実践

— Q-Uテストから見たクラスの実態とその改善を目指して —

捧 可奈子\*

### 1 主題設定の理由

#### (1) 社会的スキルの必要性と指導時数の不足

児童の社会性にかかわる問題が叫ばれるようになった。「友達と遊べない」「孤立している」などの非社会的な児童や、「すぐ怒り出す」「すぐ泣き出す」などの感情コントロールを不得意とする児童が増えてきている。この問題の背景について社会的スキルについて研究している河村茂雄<sup>1)</sup>は、「対人関係を形成したり集団生活をしたりする経験が不足している」ことを指摘し、これからの教育現場で必要なことは「集団生活でのかかわり合いを積極的に促し、相互作用から学級集団を育成していくことだ」と述べている。さらにまとまりがある親和的な学級になるためには学級内にルールとリレーション（ふれあいのある本音の感情交流）の2つ要素が確立していることが条件であり、その確立のためには①傷つけられないという安心感②人から認められているという自己肯定感③集団生活での満足感・充実感を高めていくことが大切であるとしている。そこで河村は、この3つを具現化するためにソーシャルスキルトレーニング（以下SSTと略記）と構成的グループエンカウンター（以下SGEと略記）を活用している。また、同じような考え方にプロジェクトアドベンチャー<sup>2)</sup>（以下PAと略記）の考え方がある。PAは集団での冒険活動を通じて、チームワーク、信頼感、コミュニケーション能力、チャレンジ精神などを学び、他者理解と自己理解を進めて、個人の成長と人間関係の形成を目指すプログラムである。仲間と協力して一つの目標を成功させる経験を重ねることが、一つのことを成し遂げる喜びやみんなの役に立ったという気持ちを育み、自己肯定感や集団生活の満足感や充実感を高める有効な手段であることが、数々のPA実践から検証されている。

しかしこれまでの実践では、SSTやSGEを活用するのは道徳や特別活動の領域がほとんどであった。しかしそれだけでは時数が足りず、継続的な指導としては不足しがちであった。

#### (2) 児童の実態

前任校は隣接して保育園があり、全校児童の約8割がその園出身である。学年のほとんどが単学級であることから、ほとんどの子が保育園から人間関係が変わっておらず固定化しているという実態がある。昨年担当した児童（4年生男子13名女子16名計29名）は、当初小さい頃からの偏見で「この子は苦手なタイプだ」と避けるような態度や、男女が対立する場面がよく見られた。女子同士でグループ化する傾向にあり、仲間はずれになりそうだと不安になったり、うそや悪口を言いふらしたりしてトラブルになってしまうことがあった。自分に自信がなくお互いを牽制しあっている様子から、リレーションが確立しておらず人間関係づくりがうまくいっていなかった。

##### ① Q-U学校生活満足度の結果から

4月に担任したばかりで子どもたちの様子をすぐ把握することは難しい。そこで、河村の考案した「楽しい学校生活を送るためのアンケートQ-U」（以下Q-Uと略記）で学級の人間関係を探るとともに、「学校生活アンケート」も参考にしながら個々の自己肯定感や集団生活への満足度を把握することにした。

Q-Uは2つの心理テストから構成され、学級満足度尺度と学校生活意欲尺度をはかることができる。今回は、クラスに居場所があるか（承認得点）といじめなどの侵害行為を受けていないか（被傷害得点）を数値化し、学級のルールやリレーションがどの程度確立しているか、また個々の自己肯定感や集団生活の満足感・充実感がどの程度かを把握することができる学級満足度尺度を用いることとする。

河村はルールとリレーションの確立状態から、学級満足度尺度の結果の分布は5つのタイプに分類されるとしている。このクラスの結果を見ると、全体的に分布が平均値よりも右側に集まっていることからルールはある程度確立し

\* 新潟市立鳥屋野小学校

ていることが伺える（【資料2】）。しかし、リレーションについては確立が低い状態にあり、子どもたちのかかわり合いが希薄で、どこか冷めているような雰囲気のある学級に多いタイプであることが分かった。

また河村は、【資料1】のように2つの尺度の得点から児童の特徴を4つの群に分類している<sup>3)</sup>。B群の子どもが全体の4割にもものぼり、そのうちの8割が女子児童であった。B群は自分が認められているという意識（自己肯定感）が低いという特徴をもっていることから、女子同士の人間関係づくりがうまくいっていないことが伺える。またD群に分けられた4名（A子、M子、K男、N子）のうち3名は、低学年のころからいじめや悪ふざけの対象になりやすい子どもたちで、会話も少なく表情も乏しかった。

資料1 Q-Uテストによる分類と児童の特徴

	承認得点	被侵害得点	児童生徒の特徴	人数
A 学級生活満足群	高い	高い	不適応感やトラブルも少なく、集団生活に意欲的に取り組んでいる。	5人
B 非承認群	低い	高い	不適応やいじめ被害を受けている可能性は低いが、学級内で認められることが少なく、自主的に活動することが少ない。	14人
C 侵害行為認知群	高い	低い	対人関係でトラブルを抱えているか、自己中心的な面がトラブルになりやすい。被害者意識が強い。	6人
D 学級生活不満足群	低い	低い	いじめや悪ふざけを受けていたり、不適応になっていたりする可能性が高い。学級で自分の居場所を見出せていない。	4人

## ② 学校生活アンケートの結果から

当校ではいじめが起りやすいといわれている6月と12月を「同和教育強調月間」とし、道徳や同和教育を中心とした心の教育や、学校生活アンケートでの児童の実態把握と教育相談を重点的に行っている。「学校生活アンケート」は、新潟県教育委員会がすすめている「いじめ防止プログラム」に基づき、子どもたちの学校生活満足度の実態を把握するために校内の生活指導部が作成したものである。

この結果（【資料3】）からは、一見「学校が楽しい」と感じている児童が多いようだが、質問項目3、4では、否定的に感じている子が約4割にもものぼっている。また、質問項目1においては、半数近くの子が肯定的に答え、孤立感や疎外感を感じることがあることを伺わせた。これらのことから、このクラスの特徴としていくつかの問題点があることが分かった。以下にあげてみる。

- ・交友関係が固定されがちで、児童同士のかかわり合いが希薄である。
- ・リレーションがうまく確立できずに、クラスへの満足感や充実感が低い。
- ・自分の存在に自信がもてずに、孤立感を感じたり消極的になりがちだったりする。

そこでこれらの問題の解決として、児童同士のかかわり合いの機会を増やし、一つの目標に向かって協力し合う場面をつくることで、お互いのよさを認め合ったり自己肯定感を高めたりすることができるのではないかと考えた。そしてその時間として、体験活動が多く、自己を振り返ったり協力し合ったりする機会の多い総合的な学習の時間を利用することとした。

## 2 研究の目的

本研究では、総合的な学習の時間にPAやSGEを取り入れ、一つの目標に向かって仲間とかかわり合う場面や認め合う場面をつくり、達成感や成就感、自分の存在が役に立っているという気持ちを味わう経験を積み重ねていく。そしてそれらが児童の満足感・充実感や自己肯定感にどのような影響を与えるかについて検証を行い、よりよい学級集団づくりに有効であるか探っていくことを目的とする。

## 3 研究の内容と方法

本研究の目的を達成させるために、次の手立てを考えた。

### (1) 子どもたちの自発性を促す単元構成の工夫

本単元では「優しさ」をキーワードとし、児童の身近なところにある人、動物、自然に対して「自分たちができることは何か」という能動的なアプローチを体験活動の柱としている。どうすれば他の人（物・自然）が喜んでくれるか、役に立つことができるかを念頭において活動を行うことで、子どもたちの自発的な活動が期待できると考える。

### (2) 共通の目標をもち、協力して成し遂げる活動を設定

児童同士のかかわり合いが希薄であるという実態を受け、皆で力をあわせて一つのことを成し遂げるというPA的な体験活動を設定する。活動を成功させるためには話し合う場面が多く出てくると予想される。必然的にかかわり合いも深まってくる。またグループをできるだけ少人数にして役割を明確にすることで、個々のグループに貢献しなければという気持ちが芽生え、自己存在感を高めていくことができると考える。

## (3) お互いを認め合ったり友達から学んだりする雰囲気を高める工夫

一人一人が尊重され安心して学べる環境は、個々のモチベーションをあげ、それが達成感や充実感に結びついていく。そこで活動の話し合いや振り返りの際には、お互いを認め合ったり友達の良いところを学びあったりするような工夫をしていく必要があると考える。そこで、課題設定の場面や振り返りの場面でプレnstーミングやいいところさがしなどのSGEを取り入れ<sup>4)</sup>、自分の考えを発信したり友達の考えを認め合ったりする場面を設定することにした。また、活動の振り返りのワークシートには「活動の達人」というコーナーを設け、同じグループの友達の頑張りに目がいくようにした。

## 4 研究の実際

## (1) 単元全体計画

学習活動名 「やさしさキラリ！おひさまプロジェクト29」

【★グループで協力する体験活動 ◎話し合い活動 ◇お互いのよさを認め合う活動】

学 習 活 動	
4月	<p>優しさってなんだろう</p> <p>◎優しさについて、グループごとにウェイピングでイメージを広げていく。 優しさを広げる。 ・自分たちが相手のためになる「優しさプロジェクト」を行っていくことを知る。 ・自分がしてもらってうれしかったことやその時の気持ちについて考える。</p>
	<p>「1年生」に優しくしよう</p> <p>◎入学したばかりの1年生が喜んでくれるような活動を考え、生活班ごとにプレnstーミングを行う。 ★1年生と遊ぶ会をする。 ◇活動の振り返りをし、他のグループのよかったところや工夫点を発表し合う。</p>
5月	<p>「動物」に優しくしよう</p> <p>◎モルモットを飼うことに賛成、反対の立場を明確にして話し合いをする。 ★モルモットを飼う。 ◎モルモットが元気に育つにはどうしたらよいか話し合い、班のめあてをたてる。 ◇班のめあてを交流し、いいところを自分たちのめあてに取り入れる。</p>
6月	<p>「環境」に優しくしよう</p> <p>★夢の森公園に出かけ、丸太切りリレーや里山ビンゴをする。 ・里山名人から話を聞き、里山の役割を知る。 ・里山の役割や動植物について、調べ学習をする。 ◇調べたことを情報交換し合い、よいと思ったものを自分のワークシートに書きこむ。</p>
7月	<p>★夢の森公園に出かけ、下草刈りとカブトムシの住処づくりをする。 ・里山の手入れについてその意義や方法などについて調べ学習をする。 ◇調べたことを情報交換し合い、よいと思ったものを自分のワークシートに書きこむ。</p>
9月	<p>★夢の森公園に出かけ、フィールドワークから生活に役立つ植物を見つける。 里山名人から話を聞き、昔の人の知恵と里山を守ることの大切さを知る。 ・昔の人はどのような植物を生活に使っていたかと、現代の里山の様子について調べ学習をする。 ◇調べたことを情報交換し合い、よいと思ったものを自分のワークシートに書きこむ。</p>
10月	<p>◎自分たちが里山を守るためにできることを、プレnstーミングを行う。 ★夢の森公園に出かけ、里山手入れと柴刈り、火おこし体験をする。 ・里山の減少のように、自分たちの身近にある環境問題について調べ学習をする。 ◎見つけた環境問題を付箋に書き出し、仲間分けをする。 ・自分の興味をもった環境問題について、調べ学習をする。 ◎調べた環境問題について、同じテーマごとに自分たちができることはどんなことかプレnstーミングをする。 ・調査したことや分かったことをポスターにまとめる。 ・全校児童に向けて、調べてきたことを劇で発信をする。</p>
11月	<p>◇発表会でよかったところやもっと聞きたかったところを発表しあう。 ★緑の羽根共同募金を行い、緑を増やそうという願いを全校に伝える。</p>
2月	<p>「障害者」に優しくしよう</p> <p>・視覚障害者の方から話を聞き、生活の不便さや苦労を知る。 ★点字を教えてもらい、読んだり打ったりしてみる。 ◎視覚障害者のために自分たちができることは何かを話し合う。 ★学校や町の中にある点字や点字ブロックを調べ、マップにして展示をする。</p>
1月	<p>「お年寄り」に優しくしよう</p> <p>◎地域の老人福祉施設に入居されているお年寄りが喜んでくれるような活動を考え、プレnstーミングで話し合う。 ◇アイデアを出し合い、友達の意見を参考にして活動内容を決める。</p>
2月	<p>★老人福祉施設を訪問し、交流をする。 ◇活動の振り返りをし、他のグループのよかったところや工夫点を発表し合う。</p>
3月	<p>優しさマップを作ろう</p> <p>★今までの活動を振りかえり、自分たちが広げることのできたやさしさや、これからやっていける活動をマップにしてまとめる。</p>

## (2) 自分にできることは何かを意識しながら、自発的に活動に取り組む子ども

新年度最初の総合的な学習の時間に、児童に「優しさとはどんなことか」ということを聞いてみた。「困っているときに、助けてくれること」「なぐさめてくれること」など、ほとんどの子のイメージは自分がやってもらうという

受動的なものであった。そこでこれからの活動は「自分たちにできることは何か。」「相手がよるこんでくれるにはどうしたらよいか。」という考え方を大事にして、「優しさプロジェクト」をやっていくことを確認した。

最初の「優しさ」を広げる相手を1年生にしたのは、年下に優しくしたいという思いは強いことと、「一緒に遊ぶ」という活動には魅力があり、児童の活動意欲も高まると思ったからだ。活動のグループは生活班で構成をし、様々なゲームを考えた。グループが4～5人と小人数だったこともあり、自分の役割を意識して活動に取り組むことができた。普段はあまり積極的でなくどちらかという強い子の意見に流されてしまいがちなT男は、「ジャンケン貨物列車」の遊びを提案した。グループ内では「ドッジボール」の案もあがっていたが、周りの子どもたちの「ドッジボールは当たると泣いてしまう子がいるかもしれない。」という声に後押しされてT男の案に決まり、T男はニコニコと嬉しそうにしていた。その後、T男は「チャンピオンになった子に、賞状をあげたい。」「来てくれた1年生にもプレゼントを作ろう。」など、自分のアイデアをどんどん出していき、自発的に活動することができた。T男がこれほど積極的に活動できたのは、自分のアイデアを認めてもらったことで自分の存在に自信がもてたことと、1年生に喜んでもらいたいという目標があったからである。その時の気持ちを、T男は次のように振り返っている。

今日の活動のとく点は、100点です。理由は、自分からすすんで1年生を楽しませてあげることができたからです。ほかのグループは、ジャンケンか物列車をやりました。これはほかのアイデアです。本当はドッジボールもあったけれど、みんながほかの方にさんせいをしてくれたので、うれしかったです。そして、ぜったい成こうさせようと思いました。  
～後略～

### (3) 一つの目標に向かって、力をあわせる子ども

1年生と遊ぶ会を成功させた児童たちは活動の振り返りで「1年生が喜んでくれてうれしかった。」「ありがとうと言われると、とてもいい気分になった。」などと書き、活動の充実を実感していた。そこで「さらにどんな優しいプロジェクトができるだろうか。」と話し合いをし、動物や自然（環境）、お年寄りなどへと活動を広げていくことにした。

環境へのやさしさは、環境エコ活動の考えが子どもたちの中に芽生えてほしいと期待をしていた。しかしすぐそこに結びつくのは難しい。そこでまずは自然の中で思い切り遊ぶ活動をしようと、近隣にある「柏崎夢の森公園」へ出かけていった。ここでは公園のスタッフの協力を得ることができたので、自然体験活動のプログラムを「グループで協力して行う活動」にしてほしいことをお願いした。

間伐材を使ってクラフトを作るために、丸太切りを行った。丸太を切る場面では扱いつらいノコギリに苦勞をしながらも、「斜めに刃を入れた方がいいよ。」「丸太に乗ると安定して切りやすいかな。」と改善点を出し合う姿が見られた。声を掛け合ったり励ましたりしながら協力して作業を進め、切れたときには大歓声が上がっていた。



写真1 丸太切りに挑戦している様子

また2回目に「柏崎夢の森公園」に出かけたときには、下草刈りを行った。最初は鬱蒼とした草原に「この草を全部刈るの?」と不安そうだったが、熊手や箕の使い方を教えてもらい、徐々に馴れた手つきで作業を進めることができた。終わるころには見えなかったはずの地面が見えるようになり、傍らに高く積まれた草木の山を見て「こんなに集めたなんて、すごいね。」とがんばった成果を実感していた。みんなで一つの目的に向かってがんばるという作業は団結をうみ、自分も役に立っているという喜びを味わうことができた。

#### 【H子の感想より】

今日は夢の森公園で下草かりをしました。最初は草や木がたくさんしげっているところを見て、きれいにできるのかなあと心配でした。けれどもやってみると楽しくなってきた、気がついたらたくさんえだを切っていました。たくさんあせをかいたけれど、きれいになっているところを見たらとても気持ちがよかったです。みんなで力を合わせると、無理だと思えることもできるのだなあと思いました。

### (4) お互いを認め合おうとする態度の育成

#### ① 自分の考えを発信し合い、活動計画を練り上げていく子ども

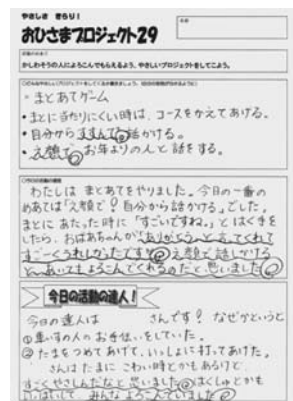
本単元の構成では、グループでの話し合い活動に時間をかけた。それは、「優しさプロジェクト」を自分たちの力で計画・実行できるようにするためである。しかし当初は、児童の実態から見て活発な意見交換は不十分であると思われた。そこで取り入れたのがブレinstーミングである。友達の意見を否定しないことと、1人1回は発言をする機会を得られるというルールを全員で確認して、話し合い活動を進めた。また、活動のグループは小单元ごとに変わったが、男女が偏らないよう担任の方で配慮をした。

1年生と遊ぶ会の計画時は「遊び」の計画ということもあり、自分の考えを出すところまでは難なく進んだ。しかしたくさん出された遊びを1つに絞るところで、話し合いが滞るグループが出てきた。自分の意見を譲れなかったり、遊びの内容よりも仲のよい子だからという理由で遊びを決めてしまったりしているからだ。そこで話し合いをいったん中止し、「みんなの意見を1つに絞るにはどうしたらよいか。」ということクラス全体で話し合った。初めは「多数決で決める。」「ジャンケンで決める。」という意見が出てきたが、それでは納得しない人が出てきてしまうという意見もあり、「アイデアのいいところを少しずつ採用する。」「自分の意見を一つ聞いてもらったら、後は譲る」などみんなの意見を尊重しようということでもまとまった。

② 活動でがんばっている友達に目を向けるようになった子ども

活動の振り返りをする際には、感想を書く場所とは別に「活動の達人」というコーナーを設けた。一緒に活動をしている友達のいいところに目をむけることで、よいものを自分の中に取り入れることができたり、お互いを尊敬しあう態度が育ったりすると期待をした。

1月に入り、地域の老人福祉施設を訪問することになった。毎年3、4年生が年に数回訪問を行っており、児童も何度か行って交流を経験していたのでお年寄りの様子は大体把握をしていた。今回は出店方式でお年寄りが喜んでくれる遊びの屋台を開催しようということで準備を進めた。この頃になると自分たちで「お年寄りが喜んでくれる活動はどんなことだろうか。」ということ意識して取り組むことができるようになってきた。M男は理科で使った教材の空気鉄砲をつかって、的あてを計画した。当日は車椅子に乗った方や手がうまく使えない方などが屋台に遊びに来てくれた。M男は車椅子に乗っていたお年寄りがなかなか的に当てられないことに気がつく、「もっと前に出てもいいですよ。」と声をかけ、自分から車椅子を押す手伝いをした。



また、手がふるえて鉄砲をうまくつかえないお年寄りには、手を支えて一緒に打ってあげるような姿も見られた。

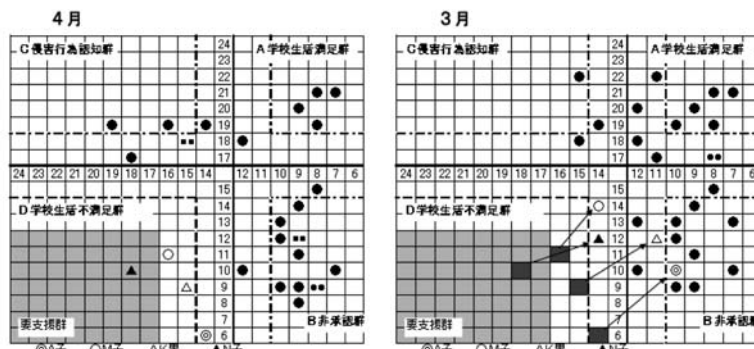
一緒に活動をしていたR子は、活動の振り返りで、右上のようなことを書いている。M男は男の子の中心的存在であったが、乱暴な口の聞きかたや女子を避けるような態度が見られるため、女子との関係がうまく築けていない子であった。しかしM男の中にある優しさを見つけることで、M男に対する偏見が消えていったことが分かる。

5 研究の成果

【資料2】 Q-Uテストの測定結果（4月と3月に実施）

(1) Q-U学校生活満足度の結果から

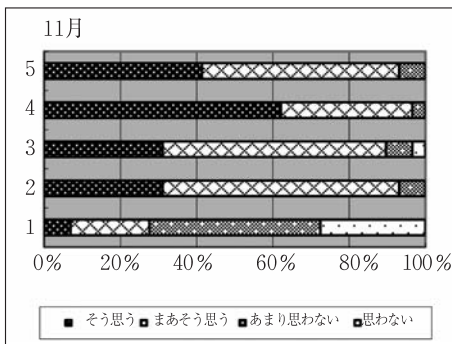
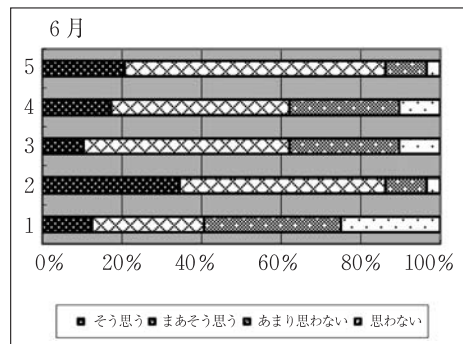
【資料2】は、Q-Uの事前（4月）と事後（3月）の測定結果である。4月段階ではDの学校生活不満足群にいた児童4人を見てみると、承認得点も被侵害得点も増え、全員右上へ上がっていることが分かる。



また、事前段階では多かった非承認群の児童の承認得点があがり、学級生活満足群のほうへプロットが広がっていることが分かる。これは、お互いを認め合ったり協力して活動をしたりすることで、自己肯定感が高まったからだと推測される。

(2) 学校生活アンケートの結果から

【資料3】 学校生活アンケートの結果



- 〈質問項目〉
- 5 学校が楽しい
  - 4 みんなで何かをやると楽しい
  - 3 このクラスがずっと続くとうれしい
  - 2 休み時間が待ち遠しい
  - 1 さびしいと感じることがある

【資料3】は、同和教育強調週間（6月と11月）の学校生活アンケートの結果である。

6月よりも質問項目3, 4で「そう思う」「まあそう思う」と答えた人数の割合が大幅に上がっている。これは、今まで行ってきた体験活動を通して協力することの良さや楽しさを知り、集団生活への充実感・達成感が高まっているからである。また自分に自信がなく「さびしい」と感じていた児童も、仲間とのかかわり合いを通して集団意識を高めたことで、孤立感や疎外感を感じなくなってきたことが分かる。

### (3) 児童の様子から

#### ① A子の変容

A子は以前まで休み時間になると図書室や教室で1人読書をしている姿が見られていた。休み時間や授業中も自分から話をするのではなく、活動が一緒のグループになった友達も戸惑っている場面が見られた。4月のQ-Uテストの結果では承認得点がかかなり低く、自分に自信がないことが伺えた。また6月の学校生活アンケートでもさびしさが結果に表れていたが、担任が話を聞こうとしても自分の気持ちがうまく伝えられない子であった。今までほとんどクラスの友達と意見を交わす経験のなかったA子は、学習でプレストレーミングが行われるようになると強制的に意見を言うことに抵抗を感じ、一時は体調不良を訴えることもあった。しかし、意見が言えなくても責めない、パスしてもよいというルールの下、徐々に自分の意思を伝えられるようになってきた。

特に「自然とやさしく」の活動で緑の羽根共同募金を行った際には、飼育園芸委員会だった彼女は強制的に募金箱を持って声を出す役になった。人の前で大きな声を出す経験の少ない彼女にとってはかなりハードルの高い活動であった。しかし募金活動の終盤には、明らかに最後のほうには自信をもって声を出し、募金をしてくれた人に笑顔でお礼を言っている姿が見られるようになった。その頃から徐々に周りの友達との交流も生まれ始めた。そして学年末には、ドッジボールや鬼ごっこの仲間に入っていることも多く、表情も豊かになってきてきた。何より、自分の意見や気持ちを伝えることができるようになってきたことは、一番の成長である。

#### ② 学級全体の変容

児童が大きな変容を見せたのは、休み時間の過ごし方である。最初の頃は交友関係が固定され、同じ子とばかり一緒に過ごしている印象を受けていた。しかし週に1回「みんなで遊ぶ日」を設けていたこともあり、みんなで遊ぶような姿が見られてきた。そのうち特別な日を設けなくとも、黒板に「今日グラウンドでもえ鬼をします。」というようなメッセージが書かれるようになり、休み時間は汗びっしょりになって楽しむようになってきたのである。みんなで何かをやるのが楽しいと感じているからに違いない。特に交友関係が固定しがちだった女子が、様々な子と遊べるようになってきたことはいい傾向であった。また少人数グループでの交流により、自分の気持ちを友達に伝えることへの抵抗感が少なくなってきた。これは児童同士のリレーションが確立してきて、何を言っても受け止めてもらえるという信頼関係ができてきたことを示す。

これらの児童の変容からも、児童同士のかわり合いを深め自己肯定感や集団への充実感・達成感を高めることは、よりよい集団づくりに有効な手立てであったとすることができる。

## 6 今後の課題

本研究を通しての課題は、話し合い活動のやり方である。プレストレーミングを用いたことは消極的な児童については大きな成果であったが、アイデアが多すぎてなかなか決まらず、かえってトラブルになってしまうこともあった。1人が何回も発言をしていくので、時間がかかりすぎたことも課題である。今後は様々な人の考えを取り入れながら、短時間で深まるような話し合いが行える方法を考えていきたい。

また体験活動を重視することで、計画を考えたり実行したりする力は高まってきたといえる。しかしどの活動も短期間で終わってしまうものばかりであったので、継続的な調査活動という点では弱かった。夢の森公園や老人福祉施設などに対象を絞り、もっと繰り返し活動をするような単元構成を考えていくことも課題である。

### 参考文献

- 1) 河村茂雄 「集団を育てる学級づくり12か月」 図書文化, 2006  
河村茂雄 「グループ体験による学級育成プログラム」 図書文化, 2001
- 2) プロジェクトアドベンチャー・ジャパン 「クラスの人間関係がぐんとよくなる楽しい活動集」 学事出版, 2005
- 3) 河村茂雄 「学級づくりのためのQ-U入門」 図書文化, 2006
- 4) 國分康孝 「エンカウンターで総合が変わる」 図書文化, 2000